

4:1 その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」 4:2 たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に座している方があり、 4:3 その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。 4:4 また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。 4:5 御座からいなくと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。 4:6 御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。 4:7 第一の生き物は、獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶ鷲のようであった。 4:8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方。」 4:9 また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に座している方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、 4:10 二十四人の長老は御座に座している方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。 4:11 「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」

導入

日本で今までに見た一番美しい景色は何ですか。

秋の紅葉でしょうか。

それとも春の桜ですか。桜の季節が一番きれいだと思う人もいるでしょう。

冬の富士山でしょうか。

日本でどれほど美しい景色を見たことがあっても、天の御座に比べれば大したことはありません。ヨハネがこの章で経験したことを私たちも経験したなら、この世のどんな景色もその美や神秘はかすんでしまいます。

残念ながら、私たちはヨハネと同じ体験をすることはできません。けれども、今日は神が私たちに教えたいと望まれることを学び、この章に命が吹き込まれるようにしたいと思います。

4 章のキーワードは「御座」です。

新改訳聖書では、4 章の中でこの単語が 12 回登場します。

神の御座は、旧約聖書に頻繁に登場します。

イザヤが預言者として召されたとき、彼は高くあげられた王座に座しておられる主を見ました。

(イザヤ 6 : 1)

詩篇の著者は、「神はその聖なる王座に着いておられる。」と語ります。(詩篇 47 : 8)

また列王記第一 22 : 19 で預言者ミカヤは次のように語りました。

「…私は【主】が御座にすわり、天の万軍がその右左に立っているのを見ました。」

ヘンデルは、「メサイア」の着想について尋ねられ、「天が開けて偉大な白い王座に座っておられる神を見ました」と答えました。

4 : 1 には「その後」とあります。黙示録でこの言い回しは、新しい幻について語り始めるしるしです。

また、時系列に沿って語られているしるしでもあります。

つまり、神のご計画と目的の中で次に起こるべきことという意味です。

(7 : 9、15 : 5、18 : 1、19 : 1)

私たちは7つの教会への手紙を学び終え、学びを先に進めていきます。
ここで、3章10節でイエスがおっしゃっていることばに注目しましょう。

黙示録 3:10 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に來ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。

黙示録 6-19 章に記された試練を教会も通されると考える人々がいます。

しかし、それでは黙示録 3 : 10 のみことばの説明がつきません。

その人たちは、「掲挙」の教えをおもに攻撃します。

しかし、神が教会を引き挙げてくださる「掲挙」そのものを否定はしません。神は何でもおできになるからです。

教会の「掲挙」自体を信じないクリスチャンは、クリスチャンが試練を耐え忍ぶというみことばをあちらこちらから探してきます。

皆さんがどの解釈を信じていたとしても、その解釈のせいで4章の祝福を台無しにしないよう気をつけましょう。

舞台は、神の御座を中心に繰り広げられます。そして、その後起こるすべての出来事について触れます。

4章の内容は、御座との関係性に基づいて要約することができます。

ヨハネは御座に関連する6つの事柄について語ります。

1. 御座に着いているのは誰でしょう。

碧玉や赤めのうのように見えるお方です。

実際に誰が御座に着いているかは記されていませんが、ヨハネはふたつの宝石に関連付けてその方を表現しました。

ヨハネが見たまぼろしは、エゼキエル 1 : 26-28 でエゼキエルが説明した内容と似ています。

エゼキエル 1 : 26-28

1:26 彼らの頭の上、大空のはるか上のほうには、サファイヤのような何か王座に似たものがあり、その王座に似たもののはるか上には、人間の姿に似たものがあった。 1:27 私が見ると、その腰と見える所から上のほうは、その中と回りところが青銅のように輝き、火のように見えた。その腰と見える所から下のほうに、私は火のようなものを見た。その方の回りには輝きがあった。 1:28 その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは【主】の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。そのとき、私は語る者の声を聞いた。

「碧玉」は、水晶やダイヤモンドのように透明な石です。（黙示録 21 : 11）

「赤めのう」は燃える炎や血のように赤い宝石です。

私が想像する情景は、炎がガラスの向こうで燃えていて、そのガラスに炎が映っている様子です。たぶん、最近の暖炉のような感じだと思います。最近の暖炉はガラスのカバーがあって安全ですが、炎が燃える様子はちゃんと見えます。

この二種類の宝石は、大祭司の胸当てにもはめてありました。（出エジプト 28 : 17）

いくつも並ぶ宝石の最初と最後が赤めのうと碧玉でした。それぞれ、ヤコブの12人の子の長子ルベンと末子ベニヤミンを象徴しています。

このふたつの宝石は、黙示録 21 : 19 に登場する神の聖なる都の土台の石でもあります。

黙示録 21:19 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイヤ、第三は玉髄、第四は緑玉、

碧玉は、神のきよさによる目がくらむほどの輝きの象徴とされます。また、赤めのうは神の怒りを象徴していると思われます。

ヨハネは、天に連れていかれました。それは、未来に起こるべきことを見るためです。最初に彼が見たのは、神の神聖さと怒りをあらわすまぼろしでした。

たいていの方は、「聖なる神」のイメージを持っています。イザヤは神をイスラエルの聖なるお方と呼びました。

私たちは神のみことばを聖書と呼びます。私たちは、すべて汚れのない聖なるものを神のご性質とつなげて考えます。

聖書の神は聖なるお方だという解釈は、たいていの方が受け入れます。

一方、神の「怒り」については、そうすんなり受け入れられません。

イエス・キリストを信じる信徒は神の怒りを心配しなくてよいと、新約聖書は教えます。

ローマ 5:9 は、信徒はイエスの血によって義と認められたので、神の怒りから救われていると語ります。

ローマ 5:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

福音に応答しようとししない人々は、神の怒りを受ける者として描かれています。

ヨハネ 3:36 は、次のように語ります。「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。」

私たちは、神の怒りがいつの日かこの地上に注がれることを、黙示録から読みとらなければなりません。

イエスを信じる人だけが安心していられます。

2. 御座のまわりでは何が起こっているでしょう。(3-4 節)

そこには、緑玉のように見える「虹」がありました。

つまり、緑色っぽい虹ということでしょう。

虹があることで、裁きの炎を少し鎮める効果があります。

創世記 9:13-17 によると、虹は神の契約、ご誠実、あわれみ、恵みを象徴します。怒りによって罪を罰する神の神聖さがある一方で、イエス・キリストにある新しい契約をとおして、神のあわれみと恵みもあるのです。

御座のまわりには、24 人の長老が座に座っていました。長老たちは、白い衣を着て、頭には金の冠をかぶっていました。

この長老たちは誰でしょう。そして、そこで何をしていたのでしょうか。

この長老たちは黙示録の中で頻繁に登場します。ですから、長老たちについての情報がいくつもあります。

長老について記されていることは次のとおりです。

1. 白い衣を着て、冠をかぶっている。(4:4,14:3)
2. 常に神を崇めたたえている。(5:11,14, 7:11, 11:16, 14:3, 19:4)
3. 聖徒たちの祈りを神のもとに持っていく。(5:8)
4. そのうちの一人は、励ます人の役割を果たす。(5:5)
5. そのうちの一人は、まぼろしのひとつを解き明かす役割を果たす。(7:13)
6. 御座の前で自分たちの冠を投げ出す。(4:10)

ここに挙げた内容から、御座のもとで長老が何をしているかはわかりました。では、彼らは誰なのでしょう。

その答えを解くカギは、黙示録 5 : 8-9 にあると考えます。

黙示録 5 : 8-9

5:8 彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっばい入った金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。 5:9 彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、

「贖い」が必要な人々とは私たちのことです。神の恵みを必要とする罪人です。

長老と訳されたギリシャ語の単語「プレスビテロス」は、教会の役員会の会長など、教会の指導者的立場にある人を指します。

この 24 人の長老は、神に贖われた教会の代表です。

白い衣は、信徒の着る服です。これは、黙示録の前後の内容とも合致します。

イエスは、サルデスの信徒に「白い衣を着せられる」と約束なさいました。（黙示録 3 : 5）

白い衣は、救われた時点で信徒がイエス・キリストの義によって覆われたことを象徴します。

（コリント第二 5 : 21）

Ⅱ コリント 5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。

イエスの死によって、信徒は神の義を与えられたのです。

3. 御座から来るものは何でしょう。（5 節）

いなずまと声と雷鳴とがありました。

出エジプト 19 : 16 には、これと同じいなずまと雷が登場します。

イスラエルの民は、シナイ山のふもとでも同じ体験をしました。（出エジプト 20 : 18）

エゼキエルも、神のまぼろしを見た際、いなずまを見ました。（エゼキエル 1 : 13）

これらのイメージはすべて、神のご臨在と関連しています。

御座から来るものは、神の裁きです。

4. 御座の前には何があったでしょう。（5-6 節）

燃える 7 つのともしびと水晶に似たガラスの海

5 節には、7 つのともしびは神の 7 つの御霊だとあります。

1 章 4 節で神の 7 つの御霊がすでに登場しました。1 章で、それは聖霊であることを学びました。

ただし、聖霊の働きにはあらゆる側面があります。

1 章には、燭台とありました。それは、屋内で使うやさしい灯りです。

ここでは、違ったイメージが描かれています。それは、燃え盛るたいまつ炎です。

士師記やナホム書では、たいまつは戦いと関連付けられています。

聖霊にはふたつの顔があることがわかります。

慰め主であると同時に、裁きのときにやって来る燃える御霊でもあられます。

ヨハネのまぼろしは、罪深い人類と臨戦態勢をとっておられる神を描きます。

アメリカ人の聖書注解者ならびに説教者であるジョン・マッカーサーは、この個所を次のように説明します。

「聖霊は、キリストを愛する人々を慰めてくださるお方である。しかし、キリストを拒む人は焼き尽くされるお方である。」
これは、非常に考えさせられる言葉です。

また、御座の前には、水晶に似たガラスの海がありました。
これは、モーセが出エジプト 24 : 10 で見たものや、エゼキエルがエゼキエル 1 章 22、26 節で見たものと似ています。
天国の様子を地上のものに例えるのはとても難しいでしょう。
ヨハネが見たものを地上にある一番近いかたちで表現したのが、ガラスの海だったのです。

5. 御座のまわりには何があったでしょう。

4 つの生き物がいました。
獅子、雄牛、人間のような顔を持つもの、空飛ぶ鷲のようなものでした。
それぞれ 6 つの翼があり、その回りも内側も目だらけでした。
その生き物は、一日 24 時間片時も休まず神をたたえていたようです。
これは、エゼキエルが見たまぼろしと似ています。(エゼキエル 1 : 4-25)
エゼキエルは、エゼキエル 10 : 15 でこれらの生き物を特定しています。
エゼキエルはこの生き物を「ケルビム」と呼びました。
ケルビムとは、神の聖なる御力と結び付けられることの多い神の高貴な御使いです。

I サムエル 4:4 そこで民はシロに人を送った。彼らはそこから、ケルビムに座しておられる万軍の【主】の契約の箱をかついで来た。エリのふたりの息子、ホフニとピネハスも、神の契約の箱といっしょにそこに来た。

詩篇 99:1 【主】は王である。国々の民は恐れおののけ。主は、ケルビムの上の御座に着いておられる。地よ、震えよ。

アダムとエバが罪を犯した後、神は彼らをエデンの園から追放されました。その際、彼らが園に戻れないよう入口にケルビムを置かれました。(創世記 3 : 24)

この「生き物」は神の特別な御使いであり、神の右腕と言えるでしょう。
神がお望みのことを何でも実行するために待機していました。

6. 御座に向けられたものは何だったでしょう。

御座におられる神に対して、賛美が向けられている情景で天国の場面が締めくくられています。

「4 つの生き物」がまず神の神聖さをたたえます。
「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方。」
イザヤ書 6 : 3 にも「聖なる、聖なる、聖なる・・・」と 3 度繰り返す場面があります。神の神聖さに並ぶものは他にありません。この御座のまわりには罪も悪も存在しません。そこに踏み込むことはできないのです。

御使いの中には罪を犯した者もいます。人間は皆、罪を犯したことがあります。主のように聖なる者は他にいません。神だけが唯一、神聖さの中で威厳を保たれるお方です。

預言者ハバククは、神をたたえました。神の目があまりにきよくて悪を認めることができず、悪を好意的に見ることはおできにならないからです。(ハバクク 1 : 13)
詩篇の著者は、「主の御名は聖であり、おそれおおい。」と叫びました。(詩篇 111 : 9)

ペテロは、「『わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない』と書いてあるからです。」と語りました。（ペテロ第一 1 : 16）

この場面では、罪の裁きを指揮なさる神の聖さをたたえています。

神は聖なるお方なので、罪を憎み、ご自身の怒りを注がれます。

ヨブは助言しに来た友人たちに「神の威厳はあなたがたを震え上がらせないだろうか。その恐れがあなたがたを襲わないだろうか。」と尋ねました。（ヨブ 13 : 11）

イザヤは神の聖さを見て圧倒され、このように叫びました。

「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者と、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の【主】である王を、この目で見たのだから。」（イザヤ 6 : 5）

神の愛は、裁きの時までその御手をとどめられます。

しかし、その時は近づいています。

皆さんが、未来の裁きのときでなく、神の恵みを今知ることができるよう祈ります。

適用

4 章から私たちの日常生活に応用できることは何でしょうか。

1. ヨハネをはじめとする聖書の登場人物で、まぼろしの中で神のきよさを目の当たりにした人たちは、自分自身の罪深さを認識しました。イザヤは、自分が赦しときよめを必要としていることに気づきました。いつの日か、私たちもイエス・キリストの裁きの御座の前に出るようになります。
それが天の御座であるかどうか私にはわかりません。
しかし、確かなことがあります。それは、今のうちにイエス・キリストによって罪を裁かれておかなければ、自らの罪に対する神の裁きを逃れる道はないということです。
イエス・キリストを自らの救い主として受け入れていないなら、今、赦しを請うことを真剣に考えることをお勧めします。
「神の裁きの座」（ローマ 14 : 10）に立ってからでは遅いのです。
2. もうすでにクリスチャンであるなら、私たちの神観は、聖書を中心とするもので、旧約聖書の預言者の経験をとおして語られたものに基づいていなければなりません。
もし神が OIC に力強く臨まれたなら、私たちは御前にひれ伏し心の底から叫ぶでしょう。
私たちの神は畏れ多いお方です。
世界中で起こった本物のリバイバルには、本物であることを証明するしるしが伴います。
それは、神のきよさと私たちの罪の醜さを深く思い知らされることです。

ヨハネ 16 : 5-11

16:5 しかし今わたしは、わたしを遣わした方のもとに行こうとしています。しかし、あなたがたのうちには、ひとりとして、どこに行くのですかと尋ねる者がありません。 16:6 かって、わたしがこれらのことをあなたがたに話したために、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。 16:7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところへ遣わします。 16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。 16:9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じていないからです。 16:10 また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。 16:11 さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。

この 8 節についての説教を私が最後に聞いたのは、2009 年 8 月 30 日です。

そのときの説教者は、英国で最後に起こった本物のリバイバルでクリスチャンになった人物でした。

スコットランドのルイス島でのできごとです。

彼女の証はとてもすばらしいので、一読の価値があります。

英語しかありませんが、revivals.org でその証を読むことができます。

神に助けていただいて、私たちが偉大な神をさらに知り、神に喜んで仕える者となりますように。